

医事雜誌 六

醫事雜誌
第六卷

490.4
Ij-3
6



No. 258

富士川文庫
631

醫事雜詔卷之陸

浪速 岩永藿齋記

山城洛西時波法雲院鼠咬毒ヲ治ル奇方アリト

聞或時年々雜記ヲ見シニ
年々雜記法雲院日記ナリ
宝曆五七亥記ナリ

蓮房 乾一 五分

右黒小豆煎膿汁ニテ一盃服之但煎服スルナリ

奇ニ妙ニ有神効云

小兒初生六日之間浴湯ヲ見合スル時ハ痘至テ

大輕痘ナル由
藏中書誠ラレニ有神効云



大坂石町長濱屋仁兵衛と云人左の眉毛脱落
 あり了數年衆医予と悉せ共不治予う門は未也
 治と乞試よ一方と施せしよ二十日よし毛生し
 三十日よしして全くと治し抄里と云故想ふ
 癰疔の急卒の者よハ梅肉くよき也七宝てハ
 おくきは也梅肉ハ急よしして七宝ハ緩ちる
 物也ち此共長く口中齧爛する有故を
 け愛思へ共是ハ已豆ぬく五六日し飲く
 めは故也実ハ梅肉くするとき也故よ卒よハ

毒とぬくハ梅肉よしして緩よハ七宝とやば
 へき也又天荆病ちとりハ生く乳と用は
 夏と有也化毒丸ハ不用共即七宝よて宜く
 同様の物也大低大風子劑桂支加木附
 湯或葛根加木附類症よ隨く用へ齧
 爛腫物ちと出ハ葛根劑可也黒色よちり
 光と帯はよの難治也此と病む人よかきうて
 合谷の肉の脱する物也合谷ハ大指食脂の
 間也七宝劑ハ必用すへき也菜種子と時分

の唯ると喰ふ時ハ其血脈ノあはれぬも、癩

疾の様ニある也、鳩巢漫筆、難波恭子敬著有之もの也

× 佳田空鈍ハ申むく、の良医ニ元ハ禪僧ニ

故世変ニ疎ク人ニ居つて、無氣性也、俗

人子用ひらまじ、然及、医術ハ上手ニ殊ニ

小児の病ニ療治する、勝まるとハ、ハハハ

薄命は、甚貧しく、漸々困窮し

けれハ益々病家より頼り、元来利欲不

をくらぬ人、他の合カと、ハハハ

病家ヲ送り、薬の料の滞り、取ら思案

と、家助雑具を賣り、夜の衾さ

へ、此時也、吉平云、薬箱

持の、忠義の志、食之、嘉といと

いぞ、主と、仕へ、空鈍ハ、吉平子

身の、吉平ハ、聞

入、且那の、念脚、運、思交

引、志、不実ハ、致、念脚、運、思交

ち、の、時ハ、兎、角、且那と、供、身、果、ハ

人と潔き徳の覺悟の体おれに空鈍と
 傳ふ日とさくけらるる今日早一日の命と保明
 食変と毎ことく成りしるる吉平の主のあま
 出て涙と落しおぐ人相と是非あき決不仕
 合よれ今日早一日の命と保明と可致と私
 ちけきばさく上るるもちるる私に今日奈何
 よとて命と捨申ス了苦まらぬを勿体ぢんれと
 と且那と其由覺悟ちるるへいと云れれ主の空
 鈍は是と聞くと足め一筆あるらるる去ぬと

死を急ぐは無用也今日如斯ぢるる亦明日
 の復は知らまじら何るる公短くもあはるる
 非也食を居らるる自然の命の時有る
 是天命と侍者也海川の身と接るる又首
 と溢ちるる死と急ぐるる不及先く決候
 子生死と天子任せと終るる必短くも死
 と致す変ぬれ但空腹を難免するべけんれ
 死ぬると覺悟あき辛節の成べきと云
 せし故吉平の主と反るる正直よのちれを

其詞を順ひて自然の息の絶ちを待たず絶食
をちりてうや三日目を案内を乞者ありけり
吉平の入口へ這出て見らば小児の口を引か
男来り金子二百匹包とたりとわし葉禮延
引致しきり厄とてあり故吉平の娘も
云人方なく主のあし月録と出し其趣と瀧
海いざ去るを直に米と調へ飯と焚てはし
上人と云と主の押止め米と買は宜しけ共
飯とを焚起るよ先く飯湯と涌し今

日ハ飯明日ハ粥と煮て食し明日飯とや
まらうに焚く食をべしと差あしけは又三
日月よりき以前難病を救ひ世貫し者也
とて五兩の金と礼を持来りしめとあり其
人の頼み依て大家の主の大病を療治す
様子成り其人の全快より深く信仰され
忽十方良匠ちりと知らぬ用運し吉平は忠
義の公より後く思ひつけあきし立身出世せ
とて我く古今名倉三十六佳撰弘化年上梓

予、穢る人野遊に出る時、小き虫梅と耳中へ入
 き、うかば、時、くくく之の耳、は、蜜、と、の、れ、は、其、香、と
 こめ、て、必、出、る、の、り、れ、と、は、や、う、の、ち、く、は、(と、ま、き
 所、を、い、ふ、と、せ、ん、と、ぶ、お、ろ、る、な、ま、と、其、友、り、人
 卒、は、思、え、て、眼、も、口、も、鼻、も、堅、く、好、ま、ぐ、め、ま、
 入、ま、る、方、の、耳、より、息、と、強、く、吹、入、れ、は、吹、ま、て
 か、之、の、耳、より、出、と、ま、く、出、出、ま、る、と、こ、ま、友、を
 から、ゆ、は、は、ま、ら、る、得、置、及、ま、る、也、用田次筆
 廣、津、柏、隣、安、藤、霜、臺、方、へ、来、り、時、彼、祐、筆

ある、梅、嶋、某、を、見、て、赤、身、ハ、不、快、あ、り、と、尋、な、ま
 如何、よ、と、不、快、の、す、春、ハ、ま、と、お、く、物、身、の、汗
 を、流、面色、土、の、如、く、ま、あ、ま、り、幸、ひ、伯、隣、居
 合、肩、の、針、を、下、り、ま、ま、ハ、気、色、せ、
 故、又、足、の、爪
 先、へ、ま、ま、下、り、ま、ま、ハ、息、を、返、
 夫、より、毎、日、療、治
 して、快、復、あ、り、伯、隣、教、示、して、云、く、此、身、ハ、未、年
 の、今、比、を、用、心、し、後、ハ、亦、り、病、気、有、也、
 其、
 以、前、より、療、治、せ、ま、し、命、全、く、ま、ま、り、と、語、ま、る
 翌、年、は、至、其、身、忘、ま、る、や、霜、臺、の、許、ハ、眼、を

乞神樂坂也武家も勤々果しく翌年よ至
其比同病もて相果しくと也 耳農後篇

有徳院様風と湯考有て夏の夕暮よ軒端り
群むら蚊を候子の袋を拵とて振ふるて近
習の面おも取り取せりき蚊と女く有り此蚊を
外科の醫師よ命有て膏薬よ致し吸膏薬
子制し腫脳を吸ふ夏奇験有りと松下隠列
漸也予も許へ未まは醫師よ詭ごんハ都て
棄劑ハ必其道理を責て用は類ひ多し

名君賢慮きり其制法汚汝汰の后果し
奇功有難有事と詭ごん日上

小児糸の法き銀を物とのみさいふとせん
水みきは數珠の珠をり此糸よ次た貫き夫を
力ちてし銀を引ひ後出せ是と臨時のときき
きて死しと必た痛く苦を救へり 閑田次筆

又銀を呑咽し滞て死し方有烏芋を食は
自らちけて下りと云

嬰兒の頻りに注し入しを腹痛の人と医を迎

嬰へ類の薬を用おしうと倍注入して遂に死し
そつ其後は死骸を見きそ背に蜈蚣喰付て
有る

飛摩多山の人紀文より書き同國に原山中ハ谷
水を食用し出らる常なるを或人暑甚しき時
み彼をを一掬吞をやく其水不消起前ハ腹
中雷鳴くはましく療すれ共驗形きが此谷に大
蛇住りせまふより其毒は當りく形くんと或
人考へて古釜の類の鉄を濃く煎して吞志

のうば平愈せり又蛇の腕皮炭薪を交れ鍋
釜破れ破るまの也其時芋茎を火に入て焼バ
忽とも如くなれり

芋茎として蜂の刺を拵れハ忽愈てあととば
寸村中の小兒戯りつと手足取と蜂を刺せて
やうて芋茎にて拵るとを虫と音多し試て後
効を覚ゆ

蜈蚣刺水をも人熱酒を其疾よくけられハ即ち
熱去り疼止まきり

反鼻咬或家の秘せる法下齧を濃煎刺す
所腫痛處を洗ハ毒氣を針トとろけて速
小治トと

金蘭齋ト云老莊者此傳隣人腹中ハ声ヲ

應シて物ヲと覺スるハ只自覺ハ

のミて他人不見暫の間ヲ止スるハ語ヲ

と云板亭安ト云ハ医老人の語成シ自のミ安

氣病ヲ有リクルがハ

藤公時平突疾有リ一時朝廷ニ出テ此疾ヲ多クいハ

少シと云ハ管公ハいハつテ退

きハ治スと云ハ

五雜俎陸子龜有突疾古今一人のミと云ハ同シ

六閑田云世子突中風吳中風ト云ハ有是実ヲ

くハ悲シきハ有ル内ニ催スてハ人

くハ形キ也

或人の話ハ毎故笑ハ不堪河乱ハ有金匱の

法の如大豆煮汁を与へテおさまリ其後尋ハ

ハ苗を食せテ少ク語リ是正シ楓樹菌

同上

金匱要畧禁忌部食楓樹菌實不止人糞汁

或土漿或大豆濃煎汁飲之

劑者從齊從刀用以齊其不齊而成其所以齊也

夫獨用之謂藥合用之謂劑 本州滙

大方 岐伯曰君一臣二佐九制之大也君一臣二佐五

制之中也君一臣二制之小也 下畧

小方 從正曰小方有二有君一臣二之小方病在兼症

邪氣專一可一二味治者宣之有分兩而頓服之

小方

緩方 奇方 單方也 急方 偶方 複方

十劑

宣劑 可去壅生毒橘皮 通劑 通可去滯通州 補劑 補可

人參羊肉 洩劑 洩可去閉葶藶 輕劑 輕可去實麻 重劑 重可去怯磁石

鐵砂類是也 滑劑 滑可去著冬葵子 潤劑 濕可去枯白

之類是也 燥劑 可去濕桑白皮

醫家七日一週云夏雜經或門子見之 吳說區

或人物身殊外痒之終夜之死也其痒之

身より場の様成虫方、肌より出ると也

右岡村七九番門訥也因云萩野林甫終るハハ疝

気ちや、或時畢丸ぬくぬく場の様の虫を捕

ハル疝の虫あり、同上

二十二日暗崔溥此月ノ五日ヨリ頭痛セシカ十七日頃

俄心痛差起リ惣身冷手足物覺任シ已ニ死ニ入ニ

トス諸人周章騒ク一人有名苗氏ヲ不知平針ヲ

以崔溥カ十ノ指先ヲ突ヤブル黒血逆飛テ泉ノ如

シ其人頭ヲ掉テ曰危哉々々然レ共療治ナキニシ

モ非スト金程保此由ヲ禮部主客司工告ク會同

館ヨリモ礼部工注進ス礼部ヨリ大医院ノ医師

朱旻ヲシテ来テ病ヲ看セシム朱旻崔溥カ脈ヲ

診云コノ症気アツカヒ多シテ外邪ヲ帯多リ香火

大気湯ヲ用ユベシト云テ飯ヲ棄テ調合メ来ル加

減セ気湯ノ更トゾ朱旻手自ト、ハ剪メ崔溥

ニ飲シム夜四更頃飲タル所藥ヲ吐ク同二十三日

早朝朱旻又来テ診云今日ハ脉体余程宜トテ

人參養胃湯ヲ剪メ飲シム崔溥人參養胃

湯ヲ飲テヨリ氣力大ニ平復スト云云下畧唐王行在記

清田君錦輝朝鮮人漂流記

堪囊抄云筑紫澳舟漂墮於新羅國則澳父
染此病而飯尔未世人罹于此疾也

證治年繩云痘疹為毒最重為稟受以來蘊
積惡毒深久之故古稱曰百歲瘡謂人生
百歲之中必不能免痘疹心印曰余考痘
之為症上古軒岐秦越人淳于公之輩未之
論列也自東漢建武中南陽征虜染流中

因然則痘肇于東漢也未知痘後沐浴用
酒出何書乎答見于全幼心鑑也櫻陰齋談

角法 唐書云醫得士一曰體療二曰瘡腫三曰小
女四曰年月口齒五曰角法

羅氏方曰氣患殮殞等病必瘦脊骨自出以壯
夫夫屈子頭指反中指夾愚人脊骨從大推向下
尽骨極指後向上來去十二二迴杰以中指於兩畔
巧極彈之若是此病瘥彈巧起作頭多可三十餘
頭即以墨上記之取三指大著竹筒長寸半一頭

留節無節頭削令薄似劍者煮此筒子數沸及熱
出筒筴墨處按之良久以力彈破可角處又煮筒
子重角之雷出黃白赤水次在膿出亦在喪出有
數之如此角之令惡物尽弓除下是ニテ角法助
力也 昆陽漫錄

人參有毒 八在順菴云西溪叢詒ニ人參許氏
說文云人漫字與參同扁鵲云有毒或生邯鄲
梁書阮考諸母疾須人參舊傳鍾山可出在
鹿引之鹿拭得此艸ト云ハ倭名抄ニ人參ヲ鹿ノ

ニケ草ト訓スルハ此ニヨルナルヘシト按ルニ說郛等ハ收
丹西溪叢詒ニ此夏ナシ金部ノ西溪叢詒ニ此アリ
鹿ノニケ艸ハ八在氏ノ說宜アルヘシ神農及諸臣ノ
參ニ毒アルヲ不知扁鵲独有毒ヲ云誠古今名臣
谷下云ヘシ梁書阮考諸傳云考諸於鍾山聽諸母
王氏忽有疾兄弟欲石之母云孝諸至性實通必
當自到果心驚而返隣里嗟異之合茶須得生
人漫舊傳鍾山所出考諸躬歷幽險累日而
值忽一鹿前行孝諸感而隨後至一呼遂滅

就視杲獲此艸毋得服之遂愈上是孝感所致也 同上

向升元升云余二歲三歲三疔痘疹ス愈テ後左手肘下ニ留毒腫痛ス是ヲ按セハ焚テ手ヲ焚ヤ如シ熟梨一枚ヲ核ヲ去搗テ滓ト共ニ取リテ腫上ニ塗シ六梨ヲ塗ル處ニ氣立テ^{ケリ}如ニ三日ニシテ全消散セリ 同上 疔厨本艸

丹溪一男子ノ飲酒房勞ノ發熱ヲ治スルニ氣血ヲ補フ藥ノ内ニ枳椇ヲ加ヘテ其病愈タリ東坡眉山集ニ

蜀ノ匡張朮カ酒果病ノ消渴ニ似タルヲ當門子

枳椇ニ味ヲ用テ治シタル^ト夏ヲ載タリ 同上

黃金花結粟米實 細研酒下十五粒

靈丹切効妙如神 難産之時能救急

浴下一人昆布ヲ生ニテ過食シタル者有夜ニ入テ胸腹

脹痛甚胸中ニ責上リ悶絶セントス薑一湯錦袋

子ヲ多用テ^ハ吐^ノ則安眠セリ 同上

大便秘結醬油ヲ温メ竹管ニテ肛門ニソクキ入レハ能通ス余數用テ得効砒霜諸毒ニ當リテ吐

逆^止難ニ冷飲シテ能止 同上

元录中相及子寡婦年四十許故^くく^く不食
 复三年以^レ复郡衛^子岁^えて召^くて是^を問^はる
 各云只食を不欲の^く其後尚其不食を^数ひ
 是^を留^むは^ば复旬餘折々白湯を飲の^く顔色
 肌膚如常人^子吳^復形^一色^をく^て其脉^を
 診^せて^もむ^事和平^形と^云十五^日
 享保の比江戸賈^ヤ家^ノの^一婢三四^日く^て度
 食^をと^是又病^むと^云取^り

大宰の外甥正田尚矩^カ家^一奴^を仕^テ長^及の
 産也一日一食^{申時食}亦不多
 浪花和田某新宅室米粒^ヲ不食^ル复七年
 常^ニ蕎麦又酒^ヲ飲^ノ俗^ニ云^{不食疳}疳^ト呼
 毛^ノ也^{醫級}所謂^{神仙}神仙^帯乎

醫級云神仙^勞之說並未見經文乃方士馮空
 控捏造病名而欺世者也夫勞或自外来
 則勞風血風之屬或自内出則情慾陰火
 之由何嘗有所謂神仙者今則以辟穀不

食而惟果是耽輒謂不餐烟火惟仙辟穀
故以神仙之名加之使病家患此疑有仙
緣置而不理乃竟致羸瘦成勞良可悲

也

此医級ト云書ハ本邦西部船未セシ書ニテ二部ハ東都工部ル
一部ハ京福井戸藏一部ハ荻野氏戸藏ニテ外ニ在キ珍書也

神仙勞ハ中焦ノ畜血ニ因テ生ル也其症五穀ヲ食セス但果
實或菓子差ヲ食ノミ如此一二三年或十年二十年至
テモ不死者ハ胃氣ヲ畜血ニテ養故ナリ其病人久キナ
服菜亦不久ハ不愈主方温胃湯ニ宜シ一度ニハ
分程烏神散ヲ兼用シ以畜血ヲ破ル台列園聞記

五軟者手脚腰背頸軟是也

五硬者手脚腰背頸硬是也

五冷者手脚氣唇面冷是也

五縮者手脚舌唇陰縮是也

五反者眼唇舌項脚反是也

五緊者咽喉口唇眼睛手脚陰囊緊是也

五陷者顙門太陽眼輪胸下肩井陷是也

五腫者手心人中舌頭陰脛膝脛腫是也

五喘者痘瘡驚風虛喘吐瀉下痢喘是也

五盲者痘瘡驚風久浮久痢久渴盲是也

不論何病皆惡候 金囊秘録

或故家除痘神方と云一軸を藏一見の序に字

此神方ハ男女不限尚歳より三歳との小児ハ実入

より唐川棟子七粒を擇白く搗碎き土鍋にて

水三杯を濃煎し布巾で漉し取ん物多し各砂摺

洗ひ其布を拭ひ風をあてぬまを乾し川棟

子を碎ぶ鉄器と忌へ四五年の小児ハ九粒を

水五杯六七歳の十五粒を水七杯八歳十歳と廿

粒九杯十一歳ハ十五歳とハ三十粒十五杯を用洗用暦

の中段除と云日と撰七度洗若五月初より八月初との

内より是をりハ切能殊更妙也余の月とて除日

を用て都合七日摺洗し復して毎歳如此するハ非

さば也此方を用まむ痘瘡を免のくおふ諸毒

瘡と染さば也譬痘瘡より共必軽也若是を信

用形を誡し手足の丹一変洗ひ残し墨べし若

痘瘡由を必其ま多聚より此方ハ唐新

安其春山と云人三人の見よきと痘瘡を仕負

幸野城隍の廟に祈りて靈夢に授り其後二人
 の子此神方に依りて急かす故神効之感りて世
 は此方と弘めり其後清朝乾隆二十四年呈義
 豊と云人楚國在勒の時痘瘡多行き故此方
 と弘めり數万の小兒を救へり又蘇州桂香集と云人
 孫五人有て此方と用りて兩隣の小兒追病存に
 是共桂氏の小兒六免と云也是皆此神効に
 由りて也

長崎林魁梅卿譯并誌

此除痘之法ハ即林氏の施印の写也尚此方の廣く
 世に流布し林氏の意の早く家々及て人々速に
 其幸ひを人々を思ふ者也

安永二未冬

予嘗而此神方と崇信する夏爰に廿年余也其
 間自他の見を試用し其神効の洩多しは
 尚此神の清意と普く至窮に蒙りて人々
 少く希ふ而已

吉田寛政戊午夏

吉田裏所子長四郎と云卑賤の者有疝氣を以て二ヶ
 月餘腦其後鼓脹の如く成て不食復十有
 餘日在て眼口塞き六脉絶一死向と然共
 鼻息女く通はと以て不葬其死と侍居たり三
 日たし時五六日たり始て口を潤り因て其妻素
 湯を持来て口へ入せし咽へ不入夫口中何や喉
 の中より密語し妻耳を口端に寄せ能く大根を
 研碎を掛て持せしと云不審形死水を与ふ
 ばと曰しと思ひ笈大根を研し碎を醬油を入

麥飯を掛て口中に入ま咽下納り收斂して又口
 を潤し再右の如くし晋まは是と曰く咽下納りぬ
 夫の腹中大に鳴り黒水を浮せり夏二升余の時
 眼を呆き殊外快し亦一盃を中む同くちの如く
 進めハ亦黒水を浮下せり一升余夜入てハ物
 語者夏平老の如く斯て八九日を輕て病床を
 離れ夫より廿年余存生し古稀の齡を過ぎ
 く物故せり 武勇雜談集
 或云人河豚を煮て喰ふ三人共毒を尚て忽倒

は然る一人側山扼子の有るを嚼て湯を
吞む專ちる吐逆と助命せり

秋の根芽 海鼠 茄子 龍胆 青砥の粉

右等水よりき立服し

梅聖愈詩

春冽生荻芽 春岸飛楊花

河狝當此時 貴不教魚鯁

泥糲汁の上子饅を喰て腹脹せ 夏有饅酢

ハ禁忌好しと云 糲とあしき

打撲の薬とて打る處へ小便を頻り塗又

數盃飲り平愈す大初夏と云 以上同上

日本醫藥の祖神ハ紀列名州郡粟嶋大明神也

少彦名の命也男体なるを女体の神と云 女人の帯下

此病を祈は復不審右之通匠の祖神ハ支那乃

神農と配 祭る處地を茶師と祭は族有る 羊師

を煩悩若を避除するを以て 藥師と号し 理号

をり 人身此病を医する 仙とあはれ 是等此品早

竟佛法熾よりて 神道衰滅の故あり 日本

ハ紛々然神國故歴史ニ神國と書記し々夏
なくと云後儒佛の教渡リ混淆マシ以以て三代
實録ニ始テ神國と云名目有と云世談辨略

醫ハ元ト剃髮ト岳帶ト腋刀非法ト舛者不能診至
尊之脉

日本古往の醫書亡逸一不傳竟正天文中武列河
越導道講ハ三喜入大明十二年留学一醫術
ニ學ヒ帰朝を一溪道三師之後是医道連綿を
一溪ノ次ハ延壽院法印 曲直瀨玄朝

玄朔ノ次ハ玄鑑氏ヲ改今大路

此末御寄合医師中 千二百石 今大路道三

半井瑞泉ハ和氣氏の末孫也 正親町院御宇賜院号
号通仙院戸菴

此末當時御寄合医師 千五百石

典藥頭後五位侍從 此餘名多クハ

岡村玄治法印 延壽院玄朔
弟子 丹關玄說

郷食庭東庵 三竹ノ弟子 竹中通菴 三竹弟子 西園
素問講此也

古林見且 大坂 長沢道壽 土佐

林 市之進 此医ヲ人參多用者ト也

北山壽庵 大坂

名古屋玄匡 京

右両匡數多匡書ヲ著シ匡道精密ニ取ル

又久志本 吉田 敷原 是等の胤當時御番匡師

中葉京都ニ後藤佐市号良山云俗匡出テ灸治藥

餌を兼療ス次並河島介号天珉松原才治 吉益周助

此等仲景ノ流ニ依テ金匱要略ニ用攻撃峻劑以

療用一古方家ト号シ今大路道三を前世家ト

称一自家を當世家ト号一日本二流と呼ぶ

和朝の匡書比中中葉衆方規矩を多く用ひるに

近代ち上になり唐匡の書を用はむとあきり

述の中京都甲賀徒舟所述古今方彙と云書子

近く藥方多く記す故以書ニ用也支那の名醫所

製之藥方理の的當を以共功能書面の如形も

不治の夏間ニ有是ハ人の稟賦ト強弱有又見

之ヲ違差有故形ハ一或ハ本州等ニ此物ニ服流

ハ不死やと何ハ其物の功能の已極と見ハ一悉

信書則不知其書是不易此名云也

世之畏途者十に一殺一人後卒徒人之所畏者ハ疾病

也療之者ハ匡也故子不為三世不療云其外邪之變
 多究動而不變不深于斯則過多一人之匡道
 可覺知事也不知匡道者誠忠孝之道且害
 身夫人身之病ハ虛實の二ツ也虚ハ正氣之虚也
 實ハ邪氣の實也人身元と受得キ者三焦の相火
 有邪氣乘虚中キハ相火に依て熱とシテ諸病
 大抵如爾然ハ寒ノ藥を用ふる當此の理也然
 其右の如く三焦の相火有且又人身の陰陽と
 陽ハ元又飲食少と熱物を食スルハ同氣を因

熱氣熾多ク夫ハ此の方寸七の寒藥胡為強熱の
 邪氣を解スルハ夏あつらんや感冒ハ勿論凡之病惟
 發表之劑可然乎發散ハ真氣漏脱の恐有と云者不當
 乎不増不減の物也奈何を邪熱に連て耗散せんや蕃椒
 猛烈形を發表ハ主藥ハ麻黄ハ勝まりと云共女
 く用てハ却て邪氣を助け毎驗多用ハれを忽發汗出
 気實を以て邪氣退く真氣を取去ハ人參を主藥と云
 然も其右の如く女之の寒藥強盛の邪熱を解難
 如故子李士材曰人參少用ハれを壅滯を多服宜

く通ふと云熱症は寒薬を用ひ可解を以共邪疾は
 押し責られく不解也万復は事理のニツは不出理を
 以て推せむ的當の復は粗語事間々有世は善人の
 榮へ悪人の可泯没は理也然るは凶悪の者と一旦繁
 榮あるるは有るは理外也理外は推道は不達の語也
 理外は即理也了理ニツと云唐士の医配劑の某
 方皆理の當然を以某の病は某の薬を用ひ
 と定め何れを非医共療用あるべし此共医は意を
 の道は不達故療病成はし是譬は其父攘羊而

子證之是理也父為子隱子為父隱是理外の權道は
 して是亦正理也理は不易也法華經の喻品は東西
 南北の位を説く其方位の配偶唐士の易經と附合を
 是理は一致也人生れて産婦乳汁通ある事於経絡
 唯曉事と云自然の妙也と云是と全く其理有るの上
 は妙なるは法花を妙法と云は玄理言詞寂滅たるを
 以妙と説く蓮花に譬喩は多し也
 疝積と痔の病人に有孰きと痔瘻の疝也此疝
 本方此藥劑強敗く敗毒散は黄芩柴胡加へ

治しつゝ夏數多有中人以上ハ身を不動搖常に
 肉味飲食を好み大抵敦阜此症多し故に発表
 子宜し京都後藤良山此症に常し蕃椒を食し
 て好と云辛熱を以て鬱を潤き発表する理也尤発明
 也釜中沸湯を少し水を加ふ亦沸上る蓋を以て
 ハ沸止りし熱寒薬より發散の功得たり石膏ハ
 至て寒薬を以て共解熱達し熱症に附子を用ひ
 是を忽熱氣を増し是内子三焦の相火有て助熱
 する故也○疝積の病に當國設樂郡野渡刺

へ入湯を以てハ奇妙に平愈を其湯温泉に非
 谷水を桶少く沸し一日に六七度に入湯を表を
 燠アツム故温散し治する成へし山中故美味を
 不食毎回浴湯を以て功驗あるを熱症に
 寒薬を以て解し其湯を以て熱因熱用
 と云權道也此れ熱を以て発表する也但列城崎
 温泉四ヶ所有後藤氏曰一湯熱湯後れり依
 之皆一の湯に入湯を○温泉所に有る就甲斐
 州有馬但列城崎豆州熱海此分過まると瘡

腫類ハ別して驗有諸病ハ藥用湯治より灸治を良
 と以當時古方家の医茶劑を荒刻にして大服とす
 小服してハ難徹四花の灸取と多くするも亦此意也
 医ハ元鑿ト作ハ茶酒ハ多く酒を以製する故酉の
 字ヲ後ト云間野氏曰此說非也醫ハ周礼六飲の
 一ト云く醫也○屠蘇の屠の字尸を忌て屠書
 と云是亦非也本字ハ瘡癩也と云和医多く明の
 薛巳の医書十六種別て理允當なりて補劑を要
 とす然ル共理のみに拘泥してハ不当症ハ依く

補佐の害有故ト名獲屋玄医ハ仲景の書ヲ依り附
 子大黃等を死劑せり人身の病不離五臟冷熱凡
 氣有八十一種之疾合て成四百四病其中不治と死
 一百一病と云

宗高陽生齊褚澄趙銜宗此輩ハ男女の脈ヲ別
 とく類徑折之曰男女陰陽雜異臟腑異は又
 男ハ頭八片女ハ六片男ハ肋骨十二女ハ十四喉
 咽男ハ舌々女ハ卑ニ尾骸骨男ハ尖リ女ハ平也前陰
 凸凹皆彩於形之外臟腑不異何異耶と云へり

人生きて、初生と嬰兒見と云三歳より九歳迄を知と云
 十歳よりを童子と云元々婦科之別扁鵲始て稱
 見医小兒と大人と云異唯驚風疳疾痘疹を
 為吳自療十男子一婦人唯く自十婦一小兒難
 と云小兒痘瘡内怪子不載仲景亦不論魏以未
 有此病唐孫真人創て立治方此病寒熱の二ツを分
 別を熱を要とす寒を要とす起脹難きと云暖め
 過せむ熱気小悩む又解を以て起脹難く但し
 出る事多く共曉星子を良とす

人の保養ハ飲食を節すしし情度を換むを要とす
 千金方ハ搖事ハ廿歳の人ハ四日に交世し三十より
 ハ八日二世四十よりハ十六日五十歳ハ廿日六十よりハ
 絶淫と云是大法也又房中補益の論有四十以後
 ハ交接を共腎精を不泄養気保益也と諸医此
 復有理と云丹溪格知論子每聖賢之心神仙之
 貴者未易為何と有房中云補益乎と云（り実
 子節を合人で口津を不出と云し同く難成るなり
 雲居禪師養生百首の詠江戸芝壽昌寺に有

とも起るは、病ははらいて、食をたぐへ、食を少く、性夜をせよ
 長命を以、麻食を食、其分別を、歩むるを、さくくと
 養生の薬を、さくると、その身を、たぐふの、ちよ、よ、を、あ、れ
 百首の中、つ二を、抄出、三河吉田林自見正森輯世談
辨畧
 支那中醫以下、ハ虎、棒と云、器を、振り、移、く、歩、行、を
 病、家、を、て、ハ、其、音、を、聞、き、呼、入、ま、し、て、療、治、を、受、く
 九州、辺、ハ、男、女、共、子、痘、瘡、を、煩、前、ハ、家、子、不、置、山、野、子、別、屋
 を、構、へ、百、日、の、洞、里、と、云、縁、類、の、者、と、其、処、ハ、不、行、と、也、九
 及、都、ハ、如、此、別、ハ、肥、の、雨、及、稠、と、云、

日本 天子痘瘡志之ハ江列山王の猿と同く煩ふ御
 快愈たまハ猿の病重くして殞は奇也

風ハ氣として天地の呼吸する虫類ハ皆風氣の所生にして
 人と裸虫の長とをれハ是亦風氣の所生也故子字中
 に虫の字を書く風ハ氣あるを以て多形元ト風ト書
 く中の百ハ生類惣括の數也人物元在と也五蘊
 仮子和合一形をちハ所生之源ハ風氣をり故子
 諸虫の子と生あると風化と云又人身ハ病子とてハ
 風ハ百病の長と云故子病の中ハ中風傷寒を大

病と云中風とハ気也榮衛不順にして外邪乘虚
入ル元ト人身ニ受ケル風気外邪の爲ニ中リ障ラレ
テ病ト云也故ニ河間ハ腎水衰ヘ中心火病ト云
病名風トハ外邪の標あり其源ハ心火より生ジト云
又丹溪東垣ト中風ハ気血の衰ヘより生ジト云病
名ハ風トシ共病因ハ気虚也ト云傷寒ト寒風ト
傷ラレ病トシト腎虚ト病ト腎の臟全
キ時ハ寒気ト傷ラレト云

素問并本草ト漢の時改号セ郡村等ト記有故

後代の医書記ありて偽書形々んと云是ハ文意悞
屈トシ間々難解ト因テ此論有因骨度之篇諦
人身之臟腑本草ト辨藥種之能毒自非聖
慮者如何を凡人之为所為哉 世諺辨略

昔ハ僧尼天文を學ビ軍書ト讀習ハ或吉山ト占
ト巫術トカ一人の病ト醫療ト金銀米錢
ト人より利子を求又ハ音楽トナリ時ハ其
輕重の罪ト行キ多ク令々見テ 箕山雜談

或醫者の云陶器の類ハ破キヤクキト云

と持持あせむしりきとまこねる金石の器と持
 形くワろけきをむ早く損考也人も又如此生得
 弱き人と考る養生をんハ長命也強剛の人も
 養生の師者まむ短命也下畧 同上
 官仕の醫者と世俗と典薬と云ひ自侍医と覺る
 人も有り侍医と官人も職負令侍医四人
 掌供奉診候医薬変ト見考る醫家
 僧形を法印僧都と叙任一通仙院延壽
 院おとく六仙法の院号成應一施薬院と

云ハ其意遠不履一又弘文院ハ法名の院号

子非也 同上

熊膽の功并真贋此辨 子癇と懐妊の婦人月
 數重うて候ハ気色一倒目眼を見開き瞳子を
 序あどし歯をうき舌をか一子足なやハ動
 ろく人夏を初より癩痼やこの如くあを子癇と云
 早く正真の熊膽を濃く水まるときハ口中へ入
 度、用べ一甚妙也予其効驗を真見考る故右
 の病考婦人の命を救えんと思ふ故是を記置也

懷妊の婦人有る家ハ兼テ正真の熊膽を求メ蓄
 置テ急ハ得テ母ヲ用テテ共赤子ヲ用テ
 夏有リいつルヲ求メ黒キイハの也ト安齊の記あり
 熊膽を蓄テ急ハ得テ母ヲ用テテ妊婦のミハテテ見
 マル家ハ急病ヲ救フ必用の藥品也されト云
 真ト下品の鑑定おくバいて其正真ト云テ蓄テ
 ベルヤされト世ハ琥珀子と稱するものハ上品
 あり己子本州調目ハ熊膽陰乾ホク用テ然ル共
 偽の者多ク但粟粒程を茶碗へ水をクミテヤテ
 入るに線の如ク筋を引ク散がるものと云ふ事
 又熊膽の佳みのハ透通テ米粒かと水ヲ入ルハ
 運轉して飛ク如クめぐるものを上品トテ外の獸
 牝膽とめぐる共熊膽よりめぐる者緩ヤク也と見ヘ
 考今我邦ニテトウカトカ又苦味の草根木皮
 を煎ク煉リ佐メ偽造するも此有リ水中ニ入ルテ線
 を引テ良トナラズ誰ト知テあれハ偽物ト亦線ヲ引
 様ニ造ルヲ多クミキマヘんハ熾火の上ニテ許至
 キ試見テアトカハハ上品也魚テクハの也

干して二色共々手を皮を取舂碎き、奉の大粒小粒
 く收醜の中より入して成の時より子此時と蒸してあ
 る日寅の時に取出し日干して干して食ふべし奉むと
 あるを一食へハ七日飢が二食へハ四十九日不飢三
 食へハ三百日不飢四食へハ二千四百日不飢して
 顔色不衰手足の働き女も男もさるさるあり
 王氏農書此三方ハ唐土まで飢饉の時多し多く人を濟し
 ば名方也と云へし因ふに人の通もぬ谷底又ハ井
 の才おとく深し落入あがが或海上までと一切の食物

の毒又まて命をつかきし志も身体気かおとろしきり
 方壽世保元子口子嶮をいいためにハのく込又ためて
 ハ飲込くくの如くすり夏一日一夜に三百二十度飲こ
 めを何十日へてと不飢と云へしこれに法きて活あり
 正徳の比とや奈良宗哲と云人武藏に住し打
 常子ハ少く安く交法僧の祈願有りて七日断食し
 て礼拝行道す同りの僧一人有り彼僧も右の法を
 のむ方を教ふ彼僧深く信じて相勸む同りの僧
 ハあささう笑して是を不用り法六日子至りて同りの

僧ハ手足痛ニ殊外ニ若シモ又唾を飲ク倍ハ事
 少クても夏かく行法滞リ壯ク満願成就スル
 を思フハ此の唾を飲マ方ハ効驗有ベク覺リ
 唾ハ身液アルを吐ク所ニ飲ハ身体の潤ニ益ス人
 夏山々々也事ハ養生ニ心得有ベク己ハ遠唾者
 枕壽を損方と匡心方ヲ見タリ 同上

藿附識屯山城淀の藩中數日不食して不飢万を
 識ル者莫ク飢餓及夏無ク其方ハ茶の
 方字不耳共実夏形ト云委爰耳又附識ト

鬼魔ラシの治療

憶病者人々或ハ婦人おまの妖怪ヲ出
 いて鬼魔死スるものおまの静ニ手モ又ハ風呂
 敷の樽チヤ物チシと病人の口鼻ニ高テ息吐出
 ンヤ子ノおまノ眼をあき
 あつキ小便一盃口ニ入法ベク志モ有テ正氣
 形也又ハ其病人を喚活スベク脚の跟を
 カ一さい口マシ咬ヘ又ハ面へ唾を吐クベク初
 燈花トモ燵ヒモをアヒルおまノ其後燈火をおクヘ若
 初ヨ暗クモ魔死スルハ燈火をとすべク

ときより是等と兼て心得置(きる也) 月上

半月春暗探物萃一山園走得脚酸麻

識齊詩 酸麻ハ脚ノピリツク夏ナリ

元氣ハ天地の根元の氣より人の胎内より造
化の司より故人カとより受変夏あるより其
気虚ある時ハ死す也 医夏或門

合薬題銘記

中風

卒中精神不正 有神 鎮神 安神 通神
鎮心 保神 定神 通関

痰涎壅盛 驅痰 化痰 蠲飲 順気 墜痰

有表証寒熱頭痛 驅風 驅邪 解肌

大便燥結 利腸 通腸 潤燥 滋液 道滯

口眼喎斜手足不遂舌強語澁 養榮 潤経

通経 通気 益榮 益髓 神真 滋髓
調経 活絡 活血 舒筋 健歩 利気

傷寒、表証 順解 解気 驅邪

傷寒、裏証 清心 解毒 通解 涼隔 除煩 半表
半裏 和解 冲和

發斑 安斑 化斑 和肌 消毒

感冒 解肌 順解

霍乱 安中 安胃 和中

脾胃 益胃 安胃 补中 和中 调中 养脾

泄泻利病 理中 和中 调中 补中 益胃 益脾 固肠 实肠 养脾

初发 通解 清脾 清肝

久瘧 养胃 鼈甲 清肌 和肌 清气

气 顺气 和气 快气 通气 解气 降气 平气 清气 调气 利气

气虚 益气 养气 补气 益胃 调气 补心 益元 养元 补气

血虚 益荣 润源 养荣 安荣 滋荣

心虚 益荣 养补 养心 安补 养荣 心补 镇心 镇神

肝虚 益元 酸枣 茯苓

肺虚 益气 温肺 清金 补肺 保肺 养肺 益胃

脾虚 益脾 益黄 养脾

肾虚 益髓 养源 润源 养元 益精 固精 锁元 保真 保精 补精 补真 滋髓

疼饮 化疼 驱饮 蠲饮 利疼 利气

咳嗽 益肺 润肺 润金 温肺 清肺 平肺 定喘 蠲饮 驱饮 利气

喘急 定喘 蠲饮 驱饮 利气

水肿 通气 补脾 养脾 实脾 疏气 保气 保脾 道带

胀满 消胀 分消 宣中 通气 利气

積聚

消積

化積

散聚

消塊

道滯

膈噎

開膈

安胃

味中

安中

快膈

嘔吐

通膈

通秘

通関

秘結

潤腸

寬腸

潤燥

通秘

滋液

淋病

安胃

通氣

通滯

利氣

滋腎

癩癩

有神

鎮補

鎮心

安神

養心

勞瘵

清肌

清骨

決羸

保真

養神

虫

化虫

征蛔

集効

檳榔

寬虫

衄

清榮

清氣

清肺

鎮氣

清金

吐血

清氣

清胃

和胃

下血

調腸

厚腸

和血

清榮

槐花

痔漏

理腸

調腸

秦芫

香殼

厚調

疝氣

通經

青橘

安腎

利氣

和氣

眼疾

洗肝

益明

滋陰

清心

清氣

頭痛

清上

清氣

清神

順氣

和氣

心腹痛

安胃

蠲痛

寬胃

檳榔

導滯

脚氣

通經

健步

調經

利氣

檳榔

黃疽 除濕 滲濕 茵陳 清肌 通解

消渴 滋陰 滋源 益津 玉泉 潤燥

損傷 退癆 損元 治血 導滯 和氣 調榮

瘡瘍 托裏 散毒 通經 消毒 內疎 清肌 清榮

月不調 養榮 安榮 順榮 益榮 調榮 潤經

血塊 消塊 退癆 消癥 征癥 散癥

妊娠 安胎 順氣 安胎 通氣 安胎 快氣 鎮胎

臨產 催生 順生

胞衣不下 牛膝 如聖 聖効

血暈 安榮 清榮 清塊 清血 清氣 生氣 生神

驚風 寫青 鎮驚 安神 宜風 鎮心

慢驚 益黃 益胃 補中 和中 補脾

疳 疔疳 木香 如聖 檳榔 肥兒

痘瘡 解肌 通解 快班 和肌 散毒

熱甚 清肌 清榮 如聖

虛證 補氣 調氣 透肌

雜方 萬全 安班 保神 和血

班疹 化班 化毒 升麻 清肌 解肌

以あの井関玄説老ハ井関ト云能の面打の子形ハ由觀世

大夫ヲ詔ハ面親のチキヲと拵リハハ觀世大夫

見て殊外不出来也詔ハ形ハ大ニ相違也トハ腹立

敷居ハ尚鐵槌之チ碎キ投付ク子供ノルハ有

是非アリ取飯リ親ヲ其通リテ極クテ急の仕合也

余の物モ有ハハハ面ハ人の面成キ親の情出ハ細工

ハハト不出来形ハをトモ眼前チ碎キ投付ハハハ

夏面打ト云ハハハハ猿樂マハハハハハ此家業ト

止ク自今形ハを余の夏を為人と思ハ色ク工夫ハ

ガ一医者ハ形ハハ一医者ハ上手ハ形ハハ御典藥ヲ形

運スハハハ觀世メハ思ハ知ハハハハハハハハハハハハ

ト入テ一筋ミク其時十六歳メ有ハハハ由彼の面乃

碎クハハハ袋ハ入キ多住首ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

上手の名ト得ク公儀ハ召出スハハハハハハハハハハハハ

比肩ト双ハ大医形ハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

の兩用諸旗本衆の療治は晝夜をまきより大敗
 の者ハ輕む変形難く觀世より手筋を以て
 玄説の療治は成大病を多く快氣を得一家の者
 共收ふ或時玄説无藥箱の下の重不結構形は
 小き袋を取出し是ハ亦医道の守也是故より
 療治も情おし公儀へ召出され是見の人を以て觀
 世御医道の御守と是有るよの御見七難有仕合とて
 載き取おし見れハ面の碎る也とて是ハ何
 仕る御変り哉と云御忘れハ拙者ハ何某子之

此面を折りしは不出來形とて打碎て棄て投付られ
 し其面也之時ハ朽遠くとも思ひし面打られハ
 大夫及子叱られ万變も無と存夫も家職を
 うく医者と成きり畢竟此面故形ハ亦業も医
 生の守是也と申る觀世極く尤将も法もや夢
 まで不奉存迷惑至極して斗方失ひ縁側子
 飛多段に跳びさうして歸り庭へあとのけり
 倒きりハ一塵も有合せき者共色も取合せ族
 様も濟り面打の子と云変是よりしとて世

河へ志れらるとや 哉老物語

或諸侯の馬の口と男すれて酒を好む者も酒の酔
心不直とて焼酎を嗜むといつくりけんかへるさめ
たのかわきとて或酒を呑み入り焼酎五合を求むるも
只五合を飲かば又度足らぬ顔はきいあるを言ふ者も
居あはせしもの共集り談ひ見度也今五合を言ふは
んはいふと云ふ彼男悦びて五合を苦むと云ふ又
五合を飲ぬ猶倍の人を言ふもや其上いふと云ふ
左方ふの飲たしと云ふ了れは言ふ人々も今五合

をあるはれは忽飲をせぬ海の人ことあやうし
興くくは人と有るもの式といひのくは程り
家の主北陣付て立出たりと云ふ我々も飲ま
しと云ふ猶有るを飲んと云ふより至又五合を
阿そくく子厚きしし厚く禮を述べ飲か
我始て十分を焼酎を飲する事悦ばしと云ふ
ぬ杵馬屋へ飯りて若きうと云ふたる度と云ふ
煙草を吸ひ忽口より火出ると見へしと云ふ
許し身うちをかりて卒倒したりと云ふ

附識 天保十一年子ノ年の変也多浪花雜波
 新地之観場柳弥助人形師才子焼酒五
 合を飲く跡より煙艸を喫くより思口鼻耳より
 煙火ゆく苦痛の旨申来ば早々右の場所へ見
 舞し最早死し是予眼前見及き亦安
 治川也多き人焼酎を多飲し熟睡する物を救
 るんと燭を鼻近く持りし其燭火呼吸り
 され火移り思あると許し死せると多や何事と
 同日の詔也必心得有べき変也

小児ハ凡て陽氣の盛人あるもの如ハ知稚の時分
 其心を用て諸変手輕よ云日の変宜し氣の逆變
 様よ結ぶ様よ温めよ思し夫故往昔の
 男女十歳の頃と志げく月代を剃り衣服ハ振
 り袖より兩腋を晒け氣の抜は様より男子ハ
 髪を結ひて鬢せぬ様の為より中剃より右又
 杯と各より道理故往昔和國一統仕来より
 左よりハ小児と冷く宜しと云非す口ハ医者
 丸薬ハ凡積聚痞度用り借丸子を治すの主と

云病根へ届く梅を要とす。夫故細末とせし薬
 と又能く丸めく用は時ハ丸粒の伝熱き白湯
 少く飲こむ苦の物也然はを細く敷く用は人
 多し左右にハ早口中へ解くも腹中を散乱
 して病根へ行き届り也。友丸薬の功能は
 咳阻して能復あぶ散薬の伝て用及き全
 食物の味ハ諸有る才も梅干と云物ハ只は入る物
 非青梅を數十日塩漬於くの後夏用の
 中子冬天子一何く于くめ梅干物故往昔ハ塩の

梅と書て其名を忍んをいと云へる物も五味の
 備りたるもの故或食毒を解し其外も功能
 有るもの備りたるもの故或 毒を却る事
 夏時毎朝用べし其塩梅一品の中も五味の
 備り有る故も寧ろ効多し 下畧 同上

久火のいぢふハ好^{ヨキ}いとくして濃汁の物も本
 ハ凝塊て有る瘀血大気も温和せしむる濃汁と
 成て出れハ也悪血も成れハ膿汁ハ出止と也 同上
 人參補薬ニ非ス惟心下ノ痞ヲ開クト云人有昔

此ヲ不信尤芳野人參ハ其味苦ノ推開ノ功極テ諸
 藥ニ勝レリ然共苦ヲキニヒ惡吞人アリ朝鮮人參
 ハ不然偏ニ元氣ヲ引クツルト見タリ又朝鮮人參ハ元
 氣ヲ補ニ非ス内ヨリ元氣ヲ張出スト云人アリ此モ不
 信先年一歳能嚙ル鷲ヲ持来リ人々嘗ヲ集テ附
 親トセシニ三光ノ嘗至テ老鳥ニテ既ニ羽モ斑ニナリ
 其音甚微テ不鮮集リシ人々此ハ惜哉音衰
 エタリト云彼三光ヲ飼フ者懷中ヨリ朝鮮人參ヲ
 取出シ僅ニ二三厘計生餌ノ中エ入テ研合シテ与

之須臾ニシテ音大ニ出轉ル復如故十日ニノ音不衰
 又生花ヲ貯ルニ水ノ入タル花筒ノ中エ朝鮮人參ニ
 分計剪ノ加フハ其花一两日モ有ツキニ七八日有ツ
 一吾明ニ誠ル処ナリ其外金瘡出血産後崩漏
 脫血等一時ニ起一死回生ノ功有_{古方}一彰_義ト_{可見}
 又云甲斐徳本ト云人梅花無盡藏ト云書ヲ選ス此
 時古方流ト云復ハ一向ニ知リタルモノナレ何レモ專ニ攻
 撃ヲ本トシタル者ニテ折ク手柄尤復多クト見エタリ
 サレ共全体カ金匱要畧傷寒論ナラ熟覽シタル

人ニテ無故自分了簡才覺多シ尤ナル許多也惟朦朧トメ手本手當トナル希也就中宝丹玉丹ト云方ヲ以テ諸病ヲ治スト甚々自滿也此方專攻撃ノ劑ニテ影シク價ノ入藥假初ニ調合セラル、藥ニ非ス其上此方ヲ用ヒタル人吾一兩人見シ共女モ効ナシ唯一人産後ノ狂症ニ用テ効ヲ得タル人アリ此ハ此方中ニ金銀水銀真珠鎮墜ノ藥多故治シタリト見ユ此方ニ非ス雖治スヘキ方許多アリ 古方節義或武人反鼻ヲ助ケ不殺食ヲ与ヘシニ不啻其人ヲ救

武人大ニ痛ヲ若ミケル折反鼻自ラ早斲ヲ含ミ未リ自食シ自死ス依テ即時ニ藥ヲ揉ミ自然汁ヲ多ク傳ヘケレハ疼モ止平愈シケルト云或土人一語夫和方ハ神代の医方也其復出云々トシ其理密也中古欽明推古の御宇百濟國の医方相渡又本朝医術名譽の人和氣丹波の支家相伝く医博士典藥頭ト備のト然共和漢混トシ神古の遺方ト云々其方術ト後世ト存せル文明年間大和國三輪山の吳人慈赫禪師神庫トあり

大已貫少彦的傳の方書を得く深く和方の蘊
奥を究め廣く諸人の病若を救ひし師の所謂
神國の人他邦の劑を服して何を効有へき和藪
の吳同土地の稟氣僻有夏也 凍青堂家言

文明十六甲辰孟春行年百七十五歲汝門慈赫述

病ハ丙也虛火實火外來の邪火也然ば万病一毒水と
云説を立ば病の字の儀と大に反す是全く曲せる
を撓めて直きまらると云へ一以貫之の例に倣て
一則と立川と萬病一氣の溜滯或ハ儒一匠一本と

云一弟二義に浴ちきり丙に水に余りけやけ
又病ハ變也無病ハ正也友平愈一たると正に復た理
を以本復快復おと云淺深輕重をかきし病ハ
變形れを也然るに病家へ何心も無く見察を
時宵に診せし病客のともや今約濕盤に入る
所へりしを以て手持不沙汰とせんと急
變を承つたとハ正變の正理に弥南にバ嗚呼其州
近年古方家匠術を以て素問靈樞を偽書
とて遠の昏也と云て不用唯證に依て治を

施と云暮分_リ匡書生の初より傷寒論のこ_ト讀
 で牛刀の態を勤む夫内経を偽書とせむ傷
 寒論と偽書也と云へ_リ内経ハ内経の徳を多_ク
 傷寒論ハ傷寒論の益を備ふ黃帝岐伯_ハか
 内の内経大古の文法_ハか_レ偽昏と云を一_ニ意_ニ穿
 え_ルれど黃岐餘意を戰國_ニ傳_ヘせ_テ則黃岐
 の昏_ハ相遠_カ夫論語_ハ有子曾子の門人の
 成_リ孝經_ハ樂生子_ニあり其手沢_ハ形_ハる_ルれ共皆
 夫子曾子の書に相遠_カ也_ハ其_ハ偽寒論_ハ長

沙大守張棧仲景の自序有_レてハ弥偽昏也所謂
 後漢書及陳壽_ハ三國志_ヲ閱_ルる_ル先_ニ後_ニ漢_ノ初
 平三年長沙の大守孫堅死_ス_ル策_權權_ハ建安三年長
 沙の大守張羨荆劉表_ニ亡_ス也_ハ羨_ハ南陽の人
 と有_レて傳_ハ不見同建安十三年追荆_ニハ劉表_ハ有
 也_ハと曹操_ハ併_ラり_キ魏の韓玄是_ヲを字_スる_ル
 赤壁の役より韓玄長沙を以蜀主劉備_ニ降_ルる
 又劉巴_ハ傳_ハみ_テ劉表死_ス曹操劉巴_ヲを征_シ劉巴
 死_ス凌_桂桂陽長沙_ヲ以曹操_ニ加_シ納_ス後_ニ先主_{是_ヲ}

蜀の有と云ふと蜀志に出来る又孫賁の
 傳に堅於長沙舉義兵右の如く見えられ張
 仲景と云ふ人傳及復実不見歟うくハ南陽の張羨
 復れ張機と偽言せざる張羨建安三年亡ひたり
 建安紀年と書くハ一紀十二年の内と云て望洋をる
 復れハ疑らくハ傷寒論の瀕卷を王叔和撰して
 機の名を設く然るん先夫ハ暫差置て内经ハ傷
 寒論ハ偽書然るハ偽をく博く漳臘く術
 子委く然る様々学ましく上古天眞論ハ陰陽意

承大論ハ胡椒丸吞ましく素人の文学人子尋らん
 て躑躅をく見若く滅き清土の文花形を古
 文孝経の大切なる書之紛失し本朝より送りて
 見れハ彼地ハ附會杜撰勝多復と思はる張仲景
 復れ漸く羅貫仲ハ演義三國志のく見へん
 と唐のハ文字舎とのの稗史然れハ更に信用を
 是なきんべ 同上

人參の効ハ古より普く世子まると雖寛文延宝の比數原
 通玄と云良醫朝鮮人參の功能を考(覺ハ大病

の治るるべきを救ひ衆人の命を助る夏限きき以て
妙術世に鳴而後典薬に至是より大功有夏你知
其比ハ室町伊勢屋孫八方にて是を求むる後七郎
兵衛十郎町に於て人參座建ツ

或小兒頭旋のこして不已二月許と服薬ナレ共不治
或医らむすりの髪毛を女に粉薬を附く治さる
能く其治方を学しよ実ハ虫の生せし下云所謂医
ハ意也と

寶曆十二年壬午九月大坂龍藏寺町米高賣人

播摩屋半兵衛娘十四歳此も去年不安土古町
二町目醫師鈴木喜伯方へ下女奉公をせし年一
小此女八月の比より傷寒をとりて病おとくりり
まむ主人鈴木喜伯より服をせしと親元へ養生
より一より傷寒熱強く昼夜たはこときて一向寂す
上堀町高田瑞庵と云へる医師に療治を求めしに
薬相應して熱さる時寝て段々快く熱をい
ふ夏もや此娘病気が漸々軽く形々随ひ食
復味外進ここの比ハ朝も夜不明に飯を大あ

檨子三盃完食し未正午あつらふ又四五盃
 くよ月覚めぬハ甘諸柿林檎栗梨其外移
 の下菓子取とせ悔し食復顆く熱いさめ也
 き共髪立目いりき声はさけむのまり人を叱
 ち親をうらみ啼くく甚く其姿形誠狂
 乱の如く依法川周齊法眼を招くこのまり周
 舟いとと脈をみ顔色を見眼中を見極め腹を急
 入り試みて云ハ是ハ病を有ま狐狸の
 類はきう也愈ま後井郡子と云へ針

醫有狐とのく妙術を得きり私で見せよと周
 ハ薬を不与依て藤井郡子を呼く見せぬハ郡
 子腹を見く是ハ狐はき也とて針を數十本
 刺く之毎日針をたし程あり狐めき
 くと見へく食復と老の如く減く悉く
 愈る

其後諸くし狐を退け藤井郡子ハ河列はきと
 石川節の石川也の藤井友介と云へ樋守也
 三十年許大坂に住居し針術を家業とす

文之旨の人形以共針の法ハ上手也

魯西垂^まを考種痘の法用^ま法ハ徒痘瘡の

膿を取腕肘寸口へ摺付^る也又かさ^ふを末

ト^く鼻の孔に吹入^とを

北槎聞略光大夫漂流記也
寛政年間飯朝

人縊死する時^ま所の土を掘^て見^れハ物有^{取捨}へ^一程

厚^て掘^時ハ地中へ深く^まづ^く入^て出^さし^必速^に取

捨^る其^処あり^再ハ人縊死^の禍有

駿河國一村^に甲^す悉^く足の肥^き処有^他処^も縁

緝^り来^はし^自ら^足腫^肥也

河内錦部郡下岩瀬村と云^処山^にせ^{十九}カ^冬井^戸

を堀^りけ^盟翌^年三月右^の井^を掘^んと^しま^りあ^り

子^乘せ^し一人^下法^少村^と音^取し^上より^呼れ^共不

谷^如何^致し^らむ^をと^又喜^人下^りら^る是^と音^取

二人^共子^死り

但馬出石代^に小^出氏^領さ^家督^早世^に生^きて^久千

代^殿代^に身^上共^に好^れて^り彼^領分^に一^村及

屈^らし^係子^煩て^死す^也田^野居^る家^内居^る

屈^らし^首骨^脊骨^と折^れら^ると^首と^卷父

櫻子死す反と云後（反く）て死す
 知れり他処へ去りて決病不道他村の若出合
 舟津組養子中取せり次子人裁て耕
 作と成難く村を去り度処へ（けり）共止まら
 音座敷をむこく殺し其報成と云傳ふ
 法更祈禱しる不止と也出石より役人たり
 村の内へ不入百姓を村の所へ呼出用事を言ひ
 不思議形煩也と出石の人語り村の名を聞
 けり失念すと云へり 老士物語

越後女将忠輝御ハ 權現様の御子とて九指目
 也六十万石金を越後高田に御在城也
 悪り積り慶長十九年 權現様御在世
 子涉勘気を蒙らせ玉い御他界に後遺
 と云元和二年八月廿二日越後を召上ら
 其朝熊へ配処後元和四年飛騨國へ配処
 其後又信別諏訪へ配処養子在天和三年
 六月三日歳九十二とて逝去也世俗に勝れ
 上戸、腹中子酒を吸石有ると云へり忠輝

高田由坐の時同國名生村の浦也（舩遊）
 由出有兼日の催めて攝師大勢集大綱を
 引せり濱也。假屋を志津らみ右の者共を
 料理し海供の者ハ申ニ不及所の役人漢
 人共追是をりされ大さ酒宴有り上下立子
 謡舞ひ下り甚沉醉せり其中は庄左衛門と
 云漢人一人素面の如し人之汝ハ酒を不飲やと問彼
 者今日の夏故何十盃をり得共未酔ハ亦
 終り酔ありと存り程給きりり飲く今日殿極

の清影も酔や度願奉り云成程也とい
 程もして極りさせんとて暮り及人子ある故樽共并
 明け三四斗と飲せり共酔り飲り遂に日暮り
 きを下役共其通りて飯り其様子忠輝々
 聞し召不思議あり者へ吞せし見んとて或時件
 の庄左衛門を召出され由次の間の録例も由吞せ
 有り勝手も分量ありとて大器もりり少子
 酒六斗吞り最早一滴も多へらき飲とやと
 極り有難り哉一生の本望を達りると悦び御

聖處へ参り枕しそけり忠輝は持子御覽
 合点のり虫変に少何持腹中へ替はる一処あり
 く腹を切りて見よとて大勢掛り押へて腹を立
 割臍臍子足と立刻見たり惣体は酒等如
 く兩腹の下は三寸余り形壺の形なるもの一ツ
 宛左右は有其口とおぼしき所ハ酒の匂ひ甚
 く夫を傾けれハ口より酒の出るゝ顆々出止る
 けり又酒を入れし御覽は多々一ツ酒三斗宛志
 せしは是重宝の物形りしを御秘藏有

鷹狩鹿狩野うけの時ハ酒を入自身の臍子
 附らぬ多と也 下畧日上

本朝醫談二編小類聚符宜抄の天平九年の大政官符
 を引て廿日已後若欲喫魚穴先能剪炙然後可食
 但乾鰾堅魚等之類煎否皆良云云本文は乾鰾の
 事あり世疱瘡は貝類を忌とて拵あつびを辨ひ
 さらば毒也痘毒目に入らばのを黒燒してさげり
 醫療羅合に見えたりと有慎言云のあつびを忌
 のみあつびを忌べざるの貝つ物を家の内へ入れだせぬ

痘疹傳心錄の諸藥性口訣に於

菜味甘鹹氣微寒和肺氣益腎氣 蛤蚧肉性

冷煮食潤五臟止消渴開胃殊功 牡蠣味鹹寒

入腎經消煩滿化痰凝固精止汗 石決明鹹平

入肝經消障翳點赤膜 外消散治陰囊腫亮

大黃牡蠣各五錢 梢硝二錢 右為末取田螺洗淨以水活

過一夜取水調前末塗腫處即愈とあるを以て

貝つ物のまぬを以て考ふるに蘇沈良方の治痘瘡

無癥の條に瘡家梅子板伊良子氏千之堂本及ひ鮑氏知不足齋本俱に瘡痴に作る今程氏六體本

齊本に不可食雞鴨卵食即時盲瞳子如卵色其

瘡如神不可不戒也 幼々新書の瘡疹愛護面

目門に熟雞鴨等卵未有不損目者雖痘愈宜數

月不食 痘疹傳心錄に或恣食諸卵害目と

見へてとひく目しひとするを雞鴨卵の卵也卵を

しらくちカヒゴといへり日本紀萬葉集東遊仙窟和名抄類聚名義抄字鏡集平他類抄倭玉

篇の卵日本靈異記の殼玉造小町壯衰唇の齧類聚名義抄の殼伊呂波字類抄倭玉篇の殼を皆カヒゴとよめり

さうを中昔よりくひといひくは後ふを貝と誤り

や卵をカヒといひハ忠見集に「すめり」と

出ふるうと見る時をうひあきゝるたへううやれり又
 能宣朝臣集子物中子つれあくのみゆる女に多の子
 をいつちるとして「出ふすめらみをとまひつても多のふを
 いろひちと物をれとむ此外後撰集拾遺集輔
 親御集蜻蛉日記空徳物語大和物語古今六帖
 源氏物語保憲女集金葉集草根集等子あり
 竹取物語のつとめこれこやとくひと燕卵ありと河社史
 記を引いていへるをき比の物語を祢津松路軒の在考記
 貞徳の油糟等子見えたり」梅園日記疱瘡忌見の條

丹波雅忠勝のいハ世子倭扁鵲と称へるを
 外國史傳尋々も高麗國の皇后の病を
 其王大宰府と請ふおこせりといふと其状の件
 毎禮のいハ御許のくく返牒子
 得彼牒你云云抑牒状之詞頗睽故更改處
 分而曰聖旨非蕃王可称宅退取而跨上邦
 誠彝倫攸斁况亦託商人之旅艇寄殊俗之
 單肩執圭之使不至封函之礼既虧雙魚猶
 唯達鳳池之月扁鵲何得入雞林之雲九厥

方物皆從却廻云々 雞林、朝鮮一名

鑿ノ僧の姿と成くハ

長成從四位上典藥師承久三年出家法名舜

仙聖日仙院為御供參隱岐後飯京有初也

方士の大宮マシ仕シ狀ハ

禁秘抄云侍医常近 龍顏者也召小板敷於

殿上倚子奉拜 天顏又召便宜所候簾中

取御脉例也後冷泉院御時俊通雅忠類

世聽雜袍著紅梅直衣近代無子細參御縁

邊者也云々 上杉問答ト云書ニ医ノ位階ノ復見工

石黒氏語テ云ク同友ハ強友ノ兄弟有リ或夜盜

賊土藏ハ忍入家財ヲ運ビ出ル身ノ様子ヲ見

枕元ハ有リ刀ヲ引提立出シ故盜賊共

庭ハ逃出追掛け矢庭ニ入リ女人ヲ

切倒シ身ハ袈裟掛キ切倒シ身ハ何

者ノ中ニ其兄諺ク足ヲ踏ミ切倒シ身ハ何

人ノ血ハ焚キ物ト語リ右兄ハ後妻アリ

切ミ雞淡せシ其年ト右踏ミ方ノ

足ハ垢切き絶く毎くしとを

東都本郷二町目阿部青沢ト云医午之院内

の賣女十五六歳あり鎖陰を療ふ肉皮を

切放くぬハ気絶せし独參湯与へ焼酒

を洗膏藥を貼し平愈せしとを以上耳囊

